

健康・医療：子宮頸がん発症若年化（中国新聞 10面 H19年3月7日水曜）

早期発見でほぼ完治 — 患者の4割は25－34歳

（広島市立安佐市民病院産婦人科部長 永井宣隆 さん）

若い女性の間で、子宮頸がんが増えている。20歳代後半から30歳代前半では、女性がかかるガンのトップ。一方で、子宮ガン検診は、対象年齢が従来の30歳以上から20歳以上に引き下げられたものの、受診率は全国平均で15%にも満たない。専門医は「早期発見でほぼ100%治るので、若年世代はぜひ検診を」と呼びかけている。（編集委員・山内雅弥）

「子宮頸がんにも最もなりやすい年齢は今や、20－30歳代」。広島市立安佐市民病院（安佐北区）産婦人科部長の永井宣隆医師（55）は、こう警鐘を鳴らす。

〔 1995年を境に兆し 〕

国の人口動態統計によると、減り続けてきた子宮頸がんの死亡率が、1995年ごろを境に増える兆しを見せ始めた。背景にあるのは、30歳代の死亡者の増加。50歳以上の死亡率が下がり続けているのと際立っている。日本産科婦人科学会婦人科腫瘍委員会の発生率調査でも、90年代以降は30－40歳代が発症のピーク。「子宮頸がんにかかった患者の約4割は、25－34歳」という厚生労働省研究班の調査結果もあり、若年化傾向を裏付けた。早期発見の鍵となる自治体の子宮ガン検診について、厚労省は2005年度から、対象年齢を、従来の30歳以上から20歳以上に拡大。その一方で、年1回だった検診を受ける間隔を2年に1回とした。

[全国受診率 14.6%]

しかし、全国の受診率は14.6%（02年度）と、若い層の検診離れに歯止めがかからない。広島市も、05年度の受診率は10.3%。「若い人が読んでいるタウン紙コミュニティー紙に記事を載せてもらおう」（市保健医療課）などPRに懸命だが、20歳代の受診者は2200人にとどまった。広島市の場合、検診でがんが見つかった人の割合は、0.06%（90－04年度）。日本臨床細胞学会広島県支部長も兼ねる永井医師は「子宮頸部から綿棒でこすり取った細胞を、顕微鏡で調べるだけの検査だが、精度は非常に高い」と、検診の有効性を強調する。中でも注目されるのが、初めて検診を受けた人のがん発見率が0.24%と、検診者平均の4倍も高いという数字だ。「たとえ、がんがあっても早いうちに見つかれば、ほぼ完治が見込めるだけでなく、赤ちゃんを産める治療法を選ぶことができる」と永井医師は指摘する。「若いから関係ない」と油断せず、20歳を過ぎたら一度は検診を受けたい。

